

僕のおそこをやさしく
包み込んでくれた。

たのしみ



—っ！

うわ
なんだ
これ…っ

たふん♡♡

たふん♡♡

あつたかくて
めちやくちゃ
やわらかくて…っ

なにより
包まれている感覚が
想像以上に心地いい…っ

たろ

たろ





「あは、ピクピクっしてします。
わたしのおっぱい、
気に入ってくれました？」

「……うん、すごくいい」

たろ

たろ



「そうですか。
では、もっと気持ちよくしてあげます」

「……」

たろ

たろ

おっぱいを寄せて、
挟む力を強めてくる。

んっ♡

ムギョッ♡

な、なんてしあわせな
サンドウィッチ……。

ムギョッ♡

手の感触とぜんぜんちがう……。







「あ、さきつぽから
透明の汁が出てきました。
これがカウパーってやつですか？」

「……そう、だね」

「なるほど。先走りとも言いますが、
こんなすぐに出てくるものなんですね」

いや、それにしても早すぎる……。

キスからずっと興奮しっぱなしだった
ってのもあるが、
風花ちゃんのおっぱいが
それだけすごいってことだろう。



「でも、これは便利ですね。
ぬるぬるしているので、
すべりがよくなります」

風花ちゃんがおっぱいに
カウパーをこすりつける。

ぬる、

ぬる、



くっ
やばい…っ

挟むときの摩擦が
すくなくなり、
気持ちよさが格段に増した。

にゅるっ

にゅるっ



「でも、もっとぬるぬるのほうが
いいですね」

「残念ながらローションは
持ってきてないので、
ツバで代用させていただきます」



ツツー、と
風花ちゃんがくちびるから
ツバを垂らす。

カウパーと混ざり、
ぬるぬる度がわかりやすく高まった。

とろろず…♡



そしてそのすべりを利用して、
上下にじごき始める。

たぽん♡

たぽん♡

ひび

ひび





「どうです先輩？
気持ちいいですか？」

「うんっ……
めちやくちゃ気持ちいいっ……」

「ふふ、いいですね。
先輩の感じてる顔、
ドキドキします」

んっ♡

ぬっ、

ぬっ、

んっ♡

風花ちゃんはうれしそうに笑って、
さらにツバを垂らしていく。

たろー

カウパーもどんどん
あふれてくるので、
気持ちよさは
しごけばしごくほど増していった。



「ふ、風花ちゃん、
もうすこしゆっくりっ」

「なんでですか？」

「速いと感じすぎちゃいますか？」

たぽんっ♡

ピク

たぽん♡

たぽんっ

「うんっ……ちよつとすごすぎる……っ」

「屋間に二回出しているおかげで
まだ耐えられているが、
そうでなければ二分も
持たずに発射してしまっているだろう。」

ピク





「ふふふ、いいんですよ、先輩。
このゲームは射精させるのが
目的なんですから、
好きなだけ
気持ちよくなってください」



「そしてあわよくば、
わたしのおっぱいがないと
生きられない身体にしています」

「くっ……はっ……」

ちゅん♡

ちゅん♡

ぬる、

ぬる、

「んふふ、だんだんわかってきました。

カリのところを

ぎゅっとしてあげるのが、

先輩はお好きみたいです」

たぽん♡

たぽん

たぽん♡

たぽん

ビク

ビク

「っ……風花ちゃんっ……
それ、すごいっ……!」



「ダメだっ……
風花ちゃんっ……
もうっ……」

「え？
もしかして
イッちやいそうなんですか？」

ひょ

たぽん

たぽん

ひょ



「あらあら、ずいぶんお早いですね。
気持ちよくなってください」

「とは言いましたが、
こんなに簡単にイッてしまわれると、
ゲームとして張り合いが
なくなっちゃうんですが」

「そ、そんなこと言ったって……っ」

ぬぷ

ぬぷ

「っ——そ、それ以上されると、
ほんとにやばいつ……」

「ダメです。
もうちょっと我慢してください。
後輩おっぱいに
あっさり負かされるなんて、
先輩として恥ずかしいですよ」

にゅわっ

にゅわっ





「それに、この体勢で
びゅっびゅっしたら、
きつとわたしの顔に
先輩の精液がかっちゃいます。
かわいい後輩に顔射なんて
非常識なことをしてもいいんですか？」

「だからっ……
いったん止めてっ……！」



「やです。

せつかくいい感じに
ぬるぬるになったのに、

ここで止めたら

もつたいないじゃないですか」

「んん……
んん……んん……んん……」

たぽん

たぽん

ひびく

ひびく

ひびく

ひびく



「んっ……いいですよ先輩っ……♡
先輩の白濁液、わたしが全部
受け止めてあげます♡」

「あっあっ……あっ——」

ぬる

ぬる





「あああああああ
あああつ……っ！」

ひっ

ひっ



自分でもあきれるほどの勢いで
射精してしまい……

案の定、
風花ちゃんの顔やおっぱいを
盛大に汚してしまった。

ぐわーっ♡



「ん……これが先輩の精液……
すごく熱いです……♡」

「はあ、はあ、はあ、はあ……」





風花ちゃんは恍惚の表情で
顔にかかった精液を指で拭い、
口のなかに入れた。

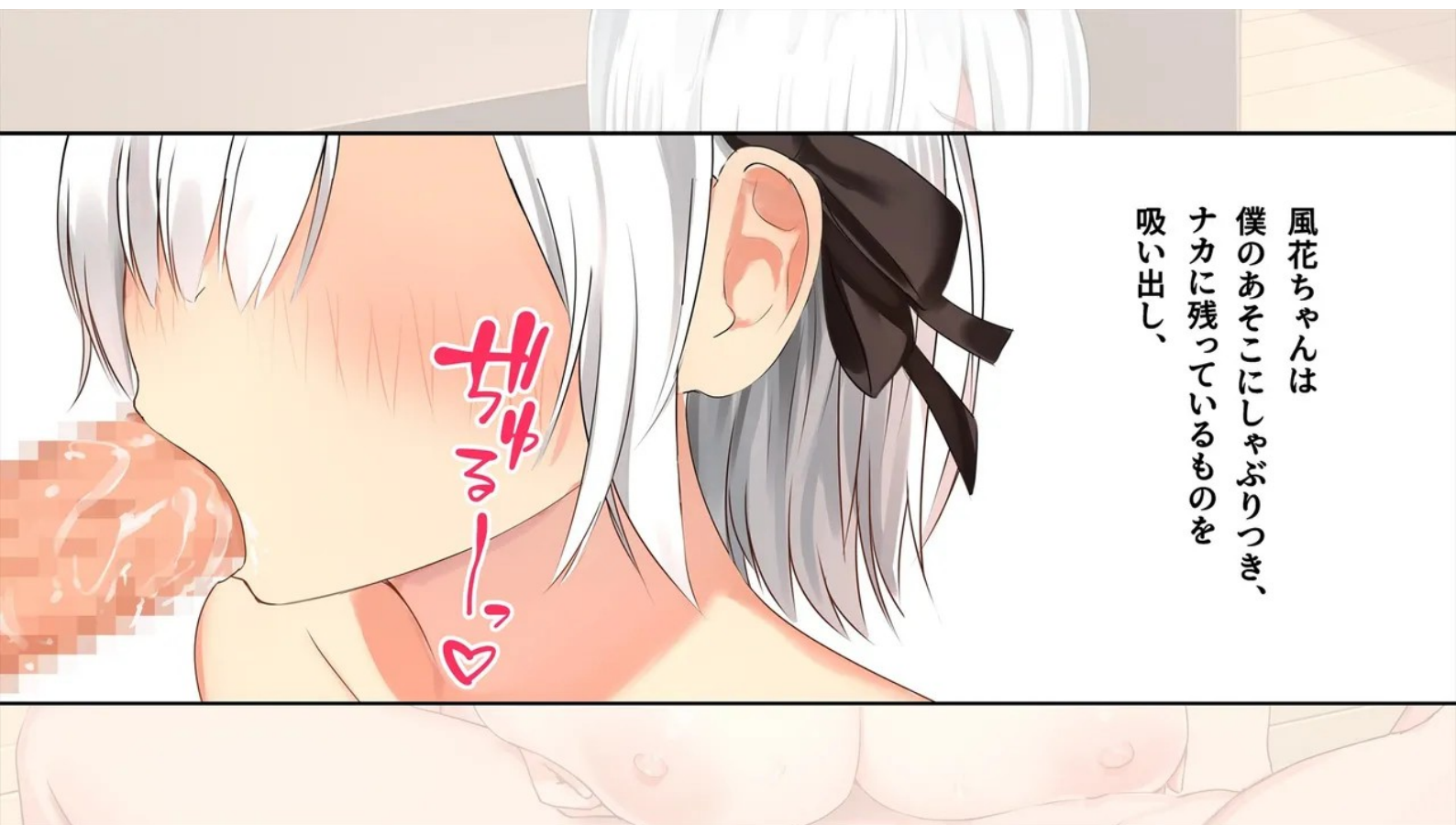
「味は……うう……
お世辞にもおいしいとは
言えませんね……」

「まあでも、健気な
後輩アピールのために、
ちゃんと綺麗にしてあげます」

「うわっ、ちよっ……!」



風花ちゃんは
僕のアそこにしゅぶりつき、
ナカに残っているものを
吸い出し、



竿についているものを
ぺろぺろと舐めとってくれた。

